

SENSOR

TOKIO MARINE
RESEARCH

TOPICS トピックス

台風 15 号はなぜ逆走した？ ～2026 年夏の気象現象を読み解く～

2026 年夏は、台風 15 号の異例の進路や令和 8 年 8 月千葉豪雨など、特徴的な気象現象が相次いで発生しました。一見すると別々の出来事のように見えますが、その背景には共通する大規模な大気の流れがありました。本稿では、2026 年 9 月に気象庁で開催された異常気象分析検討会の資料¹⁾に基づき、これらの現象が発生した背景を解説します。

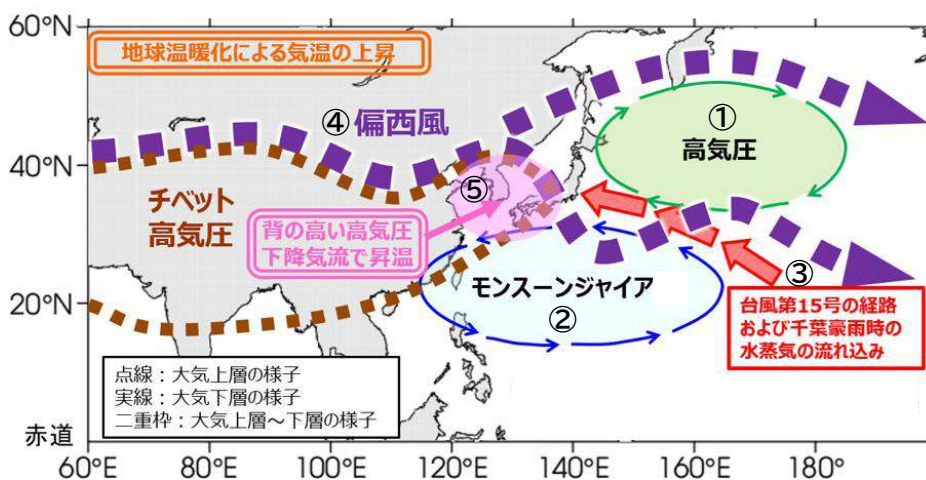
1 台風 15 号はなぜ逆走したのか？

台風は基本的に周囲の大きな風の流に乗って移動します。一般に夏場の台風は、太平洋高気圧の縁辺の時計回りの流れに乗って日本に向けて北上したのち、偏西風に乗って東寄りに進路を変えるケースが多くみられます。

ところが台風 15 号は、8 月 11 日に日本の東の海上から観測史上初めて茨城県に上陸し、通常とは逆の「西」へ進むという異例の経路をたどりしました。

台風 15 号が海上を移動していた当時、日本の東には勢力の強い高気圧（図 1①、縁辺の風は時計回り）が、日本の南にはモンスーンジャイアと呼ばれる

巨大な低気圧（図 1②、反時計回り）が形成されていました。台風 15 号は、これらの間で生じた西向きの大気の流れに乗って西進し（図 1③）、茨城県に上陸したうえ、本州を横断するに至りました。台風 15 号の異例の西進には、海上を移動中に西側に寒冷渦（反時計回り）が相次いで南下し、西向きの風が強まった影響もありました。



▲図 1 2026 年夏後半の特徴的な天候をもたらした大気の流れの模式図

（出典：気象庁 異常気象分析検討会資料¹⁾、一部改変）

2 背景になにが起きていたのか

次に、台風 15 号の異例の経路をもたらした高気圧・モンスーンジャイア・寒冷渦が発生した背景をみていきます。

－高気圧と寒冷渦－

図2のように、偏西風が北へ大きく蛇行すると高気圧が発達・停滞しやすくなります。反対に南へ大きく蛇行すると、北側の冷たい空気が流れ込みます。さらに蛇行が強まると、この冷たい空気の塊が寒冷渦（低気圧）として切り離され、日本付近まで南下してくることがあります。

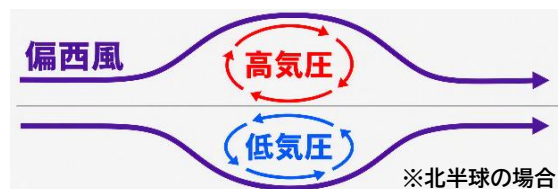
今回のケースでは、偏西風が大きく蛇行し、日本の東の海上で南北に分流したことで、高気圧(図 1①)の停滞と寒冷渦の南下が同時に発生していました。

ーモンスーンジャイアー

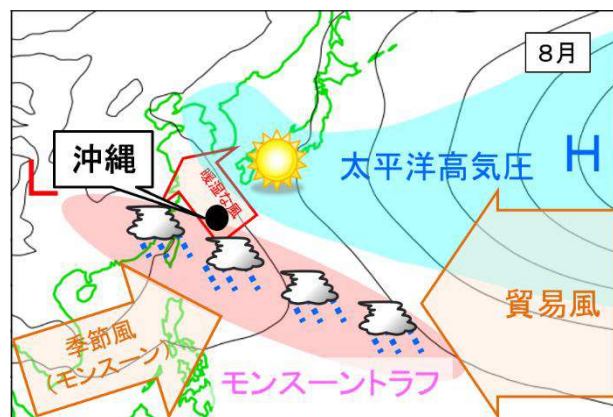
夏季には、日本の南方・フィリピン付近において、南西からアジアモンスーン(季節風)が吹き込む一方、東から(太平洋高気圧の南縁に沿って)貿易風が流れこみます。これら2つの風が向かい合うように吹くことで、モンスーントラフと呼ばれる、広大な帯状の低圧部(気圧の谷)が形成されます(図 3)。発達したモンスーントラフでは、モンスーンジャイアと呼ばれる、通常の台風よりもはるかに大きい、円形に近い低気圧性の渦が形成されることがあります³⁾。

今回のケースでは、熱帯太平洋を西に向けて進んできた台風 13 号を含む大きな低気圧が、日本の南の海上に達したところで、アジアモンスーンに伴う水蒸気を取り込みながらモンスーントラフと一体化し、モンスーンジャイアへと発達しました。

偏西風の南北の蛇行自体は珍しい現象ではありません。また、モンスーンジャイアも 7~9 月に時折現れる現象です。台風 15 号の異例の進路の背景には、規模の大きな偏西風の蛇行と南北の分流、これに伴う高気圧の停滞と寒冷渦の南下、そしてモンスーンジャイアの発現といった複数の現象が重なったことがありました。



▲図 2 偏西風の大規模な蛇行に関する模式図



▲図 3 一般的な 8 月の大気の流れの模式図
(出典:気象庁²⁾)

4 千葉豪雨とのつながり

8 月 13 日から 14 日にかけて発生した千葉豪雨にも、台風 15 号を西進させた大気配置が関係していました。日本の東の高気圧とモンスーンジャイアとの間で東から西へ向かう風が吹き続けた結果、この流れに乗って、太平洋から大量の暖かく湿った空気が房総半島の地上付近へ送り込まれていました(図 1③)。一方、日本の上空には偏西風の蛇行によって南下してきた寒冷渦が存在していました。地上付近の暖かい空気と上空の冷たい空気との組み合わせによって、大気が不安定になり、雨雲が発達しやすい状態となっていたこと、そして、太平洋から暖かく湿った空気が流れ込み続けたことは、記録的な豪雨の一因となりました。

5 最後に

2026 年夏には、西日本を中心に猛暑や少雨も発生しました。この背景にも偏西風の大きな蛇行があり、チベット高気圧が例年より日本付近へ張り出した影響がありました(図 1⑤)。つまり、台風 15 号の異例の進路、千葉豪雨、そして西日本の猛暑・少雨は、一見すると別々の現象に見えますが、その背景には共通する要因が存在していました。大規模な大気の流れが、日本各地にさまざまな気象現象をもたらした夏でした。

なお、気象庁が紹介したイベント・アトリビューション解析の結果^{1,4)}では、7 月中旬から 8 月上旬の西日本の高温は、地球温暖化がなかったと仮定するとほぼ発生し得ないことが示されました。当研究所では、異常気象と地球温暖化の関係や、イベント・アトリビューション研究の最前線、企業による備えを紹介する下記のセミナーを開催予定です。ご関心のある方はぜひご参加ください。

(主任研究員 熱田さくら)

東京海上研究所オンラインセミナー「異常気象研究の最前線～「変わるリスク」に企業はどう備えればよいのか～」のご案内

開催日時: 2026 年 11 月 13 日(金)17:30~19:00

開催方法: オンライン(Zoom ウェビナー) ※無料

参加申込は右の QR コードから。セミナー詳細は東京海上研究所ホームページをご覧ください。



- 1) 「令和 8 年夏を対象とした異常気象分析検討会の結果について」 気象庁 HP: <https://www.jma.go.jp/jma/press/2609/01c/kentoukai20260901.html#fn1>
- 2) 「沖縄の平年の天候」[コラム②] 気象庁 HP: <https://www.data.jma.go.jp/cpd/jclimate/okinawa/column2.html>
- 3) American Meteorological Society, 「Monsoon Gyre」, Glossary of Meteorology, <https://glossary.ametsoc.org/wiki/monsoon-gyre/> (2026 年 9 月 30 日閲覧); Lander, M. A. "Description of a Monsoon Gyre and Its Effects on the Tropical Cyclones in the Western North Pacific during August 1991." Weather and Forecasting, 1994.
- 4) 「令和 8 年 7 月中旬から 8 月上旬の西日本の記録的な高温に地球温暖化が寄与 - イベント・アトリビューションによる結果 -」 気象庁気象研究所 HP: https://www.mri-jma.go.jp/Topics/R08/080901/080901_press.html